

# 釣れ釣れなるままに

2016年思い出の釣行記 PART. 5

# 一日千秋の思い 鹿島釣狂

## 【岩見沢釣遊会第1回大会】

岩見沢釣遊会第1回の大会範囲は中歌港～鶴泊港である。近年は4月の大会を須築港～瀬棚港で開催することが多く、少し枠を広げてみようとして新年総会で決まったのだった。瀬棚港より奥となると私も不案内で大会範囲の下見を兼ねて行っていた。バスは瀬棚港内を走り、新港、最内川から砂取り場を経由して国道に出るコースを選んだのだが、瀬棚新港から脇道を通り最内川に架かる橋の曲がり角でバスが右折することが出来るかどうか課題だった。実際に通って見たが乗用車では通ることが出来てもバスになると何とも言えない。また、鶴泊漁港は小さな港で、そこにバスが駐車できるのかも心配なところではある。

4月24日、大会は18名の参加者を得て出発した。参加者の入釣場所を確認していくと、ほとんどが瀬棚港までで、鶴泊まで行くのは1名ということが判明した。バスの運転手には事前にそのコースを地図に色づけして渡していたが、砂取り場を通るコースを決めた責任上、私が砂取り場まで案内してそこで下りることにした。

中歌港1名、オホンドマリ3名、そして瀬棚港内に12名を下ろし、問題の最内川に架かる橋への右折場所に着いた。やはりバスはぎりぎり右折することは出来なかった。瀬棚港内を逆戻りして、国道に出ることになった。私は、北海道栽培漁業瀬棚センターへの看板が出ているところで下ろしてもらった。砂取り場まではおよそ1kmそして砂浜を300m程戻ることになった。その先は鶴泊に向かう荻野氏に託した。

午前0時にはバスを降りた。初めて入釣する場所でもあり、ポイントになるようなところを捜しながら歩いた。後志利別川から流れ着いた草木や千切れた海藻が磯伝いに堆積しており、その一部は海岸沿いにも漂っていた。闇夜でも幾つかの大きな根が見え隠れして

おり、浮遊ゴミも少ないところを選んで3本の竿を出し終えたのは午前1時を回っていた。天気は上々で風波とも穏やかでなんだか釣れる様な気がする。

小気味よいアタリが出た。早速ゴロにアカハラが食い付いたかと思って砂浜に慎重に引き上げると、その主は35cm強のクロガシラだった。この砂取り場はアカハラがメインで時たま大型が出ると聞いていたので入釣したのだが、最初に嫁にも出来そうなクロガシラが来たので驚いてしまった。これは期待が持てそうだ。また、同じようなアタリがあったがこれもクロガシラだった。苫小牧港ではほんとに小さなアタリを食い込むまで我慢しながら合わせていたのに、この活性の良さはどうしたのだろう。



初物はパナメイエビに食い付いていた。

今度は、先ほどと違ういわゆる三段引きとなるアタリが出た。アカハラだとするとかなりの大物だ。波打ち際で横に走った。寄せ波に乗せて砂浜にずり上げると、魚が跳ねた反動でハリが外れてしまった。慌てて魚に駆け寄り足で蹴飛ばしながら取り込んだ。その主は胴回りの太い45cm強のアブラコだった。アブラコも出ることがあると聞いていたが、まさか私に釣れるとは思ってもいなかったもので、その喜びは大きかった。

その後、クロガシラやアカハラの小物は釣れるのだが、大物は出なかった。明るくなってきた。5時頃、今度は小さなアタリが出るのだがなかなか食い込まない。竿を手に持ち、道糸をゆるめて様子を聞いてみる。撓<sup>たむ</sup>んでいた道糸がスーッと伸びて竿先にアタリを感じた。竿を大きく煽ると乗った。大物だ。三脚を立てていた盛り上がった砂浜から下りて、波打ち際でやりとりした。竿を横に寝せて寄せ波に乗せて慎重に取り込んだ白い魚体は、胴周りの太いアカハラだった。メジャーを当てると50cmを超えていた。鼻の奥が熱く潤

み、背筋がブルッと痺れるような感覚だ。見渡す限り誰もいない砂浜なので、自然に喉奥から「おうおう」という叫び声が込み上げてきた。

サクラマスを狙ったルアーマンがやってくるようになった。アタリも遠のいてきたので、私もルアーマンと同じように、左へ左へと三脚を移動させながら、隠れ根に向けて遠投しながら打ち続けた。しかし、釣れてくるのはハゴトコや手の平大のクロガシラで、めぼしいモノは上がらなかった。

今年度の釣り場範囲を決める役員会では瀬棚港の釣り場が話題として取り上げられた。釣遊会では防波堤での釣りは禁止となっている。港内にある幅の広い中防は乗ることが許されているが、外防や内防などのいわゆるツノやテトラに乗ることは厳禁なのだ。しかし、近年新しく造成された最内川の砂防堤、その外側に造られた1本砂防堤には乗ってもよいのだろうかということが話題になったのだ。喧々がくがくの議論が続いたが、なかなか話はまとまらず、今回は注意しながら1本砂防堤にも乗ってよいことにするというお達しが出たのだ。最内砂防堤にはN氏、K氏、O氏の3名、砂取り場の1本砂防堤にはG氏、R氏の2名、合わせて5人が乗ったが、成績の方は今一であった。



波も穏やかで絶好の釣り日和だった。時折、風車がヴオンと唸った

審査は須築港で行った。参加者18名の内10名が千点を超え、4月の大会としては比較的よい成績だった。身長優勝は瀬棚港で最後の最後に50cmのアブラコを釣り上げた前



野氏だった。2位は瀬棚港でカジカを大釣りした嵐氏の1293点、3位は鵜泊まで足を伸ばした荻野氏で1229点だった。そして、優勝はアカハラ49.6cm+アブラコ45.2cm+3.96kgで1344点の私だった。まあ、まぐれも実力うちということで・・・。



左から身長優勝：前野、3位：荻野、2位：嵐、優勝：筆者



筆者の提出魚

## 【ハワイ旅行】

4月21日から娘の悪阻、娘婿の肺気腫手術入院等で、娘と孫をあずかることになった。娘婿が退院し、娘の状態も若干よくなってきたので、5月13日（金）～14日（土）に士別へと娘と孫を送り返してきた。

その次の日の15日から20日まで海外旅行に行ってきた。退職後、海外旅行に行こうと女房と約束していたことを実現したわけだ。旅行先は一番手っ取り早く、日本語も通じるといことでハワイということにした。珍道中だった。実際にはハワイ島、マウイ島で日本語がなかなか通じずに難儀した。特に入国手続きや荷物検査には戸惑い、何度もゲージを潜ることになった。ワイキキのあるオアフ島では、ようやく片言が通じるようになって慣れた頃に出国となったが、不安ばかりで決して快適な旅とは言えなかった。

唯一楽しかったのは、マリーナ散策で、カジキマグロ釣りの装備を備えた豪華ヨットが係留された港内を覗いていると、海底には様々な熱帯魚が泳いでおり、水族館のようだったことだ。また、ツアーの申込は私達の他に1組の夫婦だけだったが、そのご主人が小樽の釣り会に所属している山田雅志氏だったことだ。磯でルアーを引いたり、渚で投げ釣りの竿を立て掛けてあったりするのを見て、釣りの話になり、お互いの趣味が一致していることが分かったのだ。それも釣り会のメンバーだったことに驚いた。山田夫妻が3回目のハワイになると言うことで、様々なところで助けて頂き一緒に観光しているだけで心強かった。

後日、新聞の「釣り会成績」の覧を見ると、その山田氏が小樽釣和会第2回大会で3位に入賞していた。6月12日、歌島～栄浜大平盤、907点（1+7）だった。やるなあ！嬉しくなっちゃうなあ！

## 【岩見沢釣遊会第2回大会】

さて、その旅行から1週間が経っての5月28日、岩見沢釣遊会第2回大会が開催された。今回は「とんとん会」が主宰することになっており、気が楽な大会だった。

私は、この日の入釣予定を、全くの凧の時は穴潤平盤、波が1.5mぐらいなら軽臼平盤か江ノ島水田前、大時化の時は寿都漁港と考えていた。天気予報では波2.5m後1mとなっていたので、前野氏が入ると言っていた軽臼平盤に入ることにした。昨年、2度の入釣経験があるので、多少波が高くてもどこかに死んでいるところを見つけることができるだろうという思いからだ。

前野氏と一緒にバスを降りようとする前野氏が急遽、釣り場を新甫川に変更したというので、私は、江ノ島水田前に下りることにした。ここは初めての釣り場になるが、航空写真を見ると磯際から100m程の範囲が黒々としており、海藻が付着していることが分かる。沖には魚礁が埋められており波消しの役割も果たしている。磯は砂浜なので、多少の波でも危険なことはない。

釣り場には釣り人が誰もいなかった。明け方にはアメマスやサクラマスを狙ったルアーマンが押し寄せてくるかも知れないが今のところは私一人だ。海況は非常によさそうな気がする。ベタではないので月夜に照らされた海面に海藻が漂っているのが分かる。そこら中に根があるらしく、これといったポイントは見あたらず、沖の魚礁と魚礁の間辺りで竿を設置した。

まずは、2本の竿にゴロネット仕掛で近投にした。もう1本はロケットカゴ付き2本バリを中投した。魚からの反応がなく、2、3回餌を付け替えていると、コツンコツンとしたアタリが出た。審査規定の20cmには満たないガヤだった。近投にゴツンゴツンとアタリが出た。あげてみると今度は立派なハチガラだった。しかし、根掛かりも多い。よいアタリがあっても、魚を取り込めないことも多かった。また、30cm弱のハチガラが上がった。ここはハチガラ場らしい。アタリを見逃してしまうと根に潜られて出てこないのだ。獲物が付いていなくてもリールを巻いている最中に海藻が絡まってくる。途中で生えている長い昆布やホンダワラが引っかかりそれを千切りながら仕掛を回収することが多かったのだ。

潮が高くなってきたので三脚を立てた付近に波が押し寄せるようになり、三脚を後ろに移動した。更に波が高くなりもう一度退却せざるを得なかった。突風が吹き始めた。小砂利が顔に当たって痛い。三脚の横に自分の竿袋が飛んできた。後ろを見ると、仕掛バックから仕掛を入れたビニル袋が飛び出して砂浜に散らばっていた。強風によって竿が何度もなぎ倒された。沖は白兎が跳びはねるようになった。岸浪も高くなり、根掛かりも益々ひどくなってきた。



江ノ島水田前は突風が吹き荒れて波が高くなってきた



移動しようかと思いついて悩んでいると、遠投の竿に小カジカとハゴトコがダブルで来た。遠投に切り替える。しかし、沖にまで根原は広がっているらしい。上手く仕掛を抜きあげても途中で海藻に絡まってしまう。

7時、残された時間は後3時間。千走漁港まで移動することにした。距離にしておよそ4kmほどだろうか。移動だけで1時間はかかるとしても漁港内での釣りは1時間ほど出来るだろう。このまま根掛かりばかりを繰り返して、何も釣れないよりはマシだ。大急ぎで荷物を片付けて、千走漁港へと向かった。

途中、江ノ島トンネルが見えてきた。「日本渚百選認定」の看板が立てられていた。その下の海岸を覗いてみると水田下とは違って、なんだか釣りができそうである。北国澗の陰になって波が押しえられているのだ。少しの時間しかないがそこで竿を出すことにした。根は所々に見えるがほとんど砂地だ。胴突2本バリ仕掛にカツオを付けて遠投した。2本目を用意していると、竿先が波に揺られてグリーンと重みが乗った。道糸にゴミが絡みついているのだ。引き上げようとする非常に重い。ようやく引き上げてみると、流れ昆布やホンダワラが仕掛に絡みついていた。ゴミを丁寧に取除いてからもう一度振り込んで三脚に竿を置いた。状況は先ほどと同じである。波打ち際に漂流ゴミがおびただしく浮かんでいるのである。2本体制は諦めて、1本を手にとって高く掲げて対処することにした。なんとかゴミが漂流している限界を避けることができたが、砂地で仕掛が潮に流されていく。自分もその流れに合わせて移動する。1時間ほどやっただろうか、全くアタリがないまま時間が過ぎて締め切り時間を迎えてしまった。



江ノ島看板前に移動した



江ノ島トンネル前の磯は釣りができる状態だったが浮遊ゴミがひどかった



優勝の堀内正博氏

審査は弁慶岬燈台駐車場で行った。優勝者は堀内正博氏で、婿にアカハラ43.0cm、嫁にアブラコ39.0cmの大物を出し、重量でも3.35kgを獲得するという快挙で、「とんとん会」の規定により身長賞も獲得するという暴挙?だった。堀内氏が釣り場に設定し



た折川河口は、暗い内からアブラコが次々とヒットし、アカハラを釣り上げた時点で入賞を確信し、河口にゴミがたまりだした頃には竿を片付け、旧大阪ドライブインまで散歩したとのことだった。なんでも入釣時前に臨時に参加して頂いた佐藤和郎氏のご示唆があり、その賜だったらしい。とんとん会・釣遊会を代表する最古参だが、仕掛や餌の工夫にも余念がなく、長年の感の冴えと相まってもたらした結果であろう。なにより楽しい釣りをしたいという彼の飽くなき姿勢を見習いたいものである。

準優勝は、西脇 浩氏だった。彼は床丹で大物アブラコを射止めてきた。釣り場が競合していたベテランの西川氏や岡氏を差し置いての活躍だった。3位は得意とする新甫川に入り、カジカをゴロッと揃えてきた荻野氏だった。釣り場が競合していた前野氏、嵐氏はその後塵を舐めることになった。

お客で乗って頂いた佐藤和郎氏は軍艦岩に向かった。いつも素晴らしい釣りを魅せてくれる彼だが、今回、軍艦岩にようやく上がったときには、怒濤の波が打ち寄せて釣りをさせてもらえなかったようだ。

今回の釣りは、数字に関する四文字熟語でお茶を濁そう。

「三寒四温の季節を迎え、穏やかな天気予報に千載一遇のチャンスとばかり一攫千魚を狙ったが、八面六臂の大活躍とはならず、四六時中、砂嵐のような突風に十中八九竿を薙ぎ倒され、四方八方に打った仕掛も怒濤の波に打ち上げられ、四苦八苦、七転八倒の釣りを余儀なくされ、九死一生、三十六計逃げるにしかずと朽ち果てた。一期一会で巡り会い、十人十色、千差万別の釣り仲間、海千山千の強者が百発百中、千客万来と大魚を釣り上げ億万長者の風格漂う。1回大会の栄光を一日千秋の思いで飲んだ自棄酒も五臓六腑に沁みたとはいいがたい。」